東医大誌　51(4): 405〜407, 1993

研究会報告

第30回
東京医科大学内分泌代謝研究会

日　　時：平成4年12月15日（火）
午後5：30〜
会　　場：東京医科大学病院 研究教育棟
第一講堂（3F）
当番幹事：産科婦人科学教室
特別講演：Gene targetting による
疾患モデルマウス作成の試み
(財)癌研究会研究所
細胞生物部長
野田哲生先生

1.　含糖酸化鉄の投与により生じた低リン血症の一例－特に、その成因について－

（老年病学）近喰　櫻、加納広子、大野大二、深谷修一、小川公啓、今村敏治、高崎　優

81歳、女性。平成元年12月[redacted]肺炎にて入院する。高血圧、慢性腎不全並びに不整脈（発作性心房細動、発作性上室性頻拍）を合併している。既往歴として21年前に胃潰瘍にて胃切除を受けている。平成3年1月生化学検査にてアルカリフォスファターゼ（骨型）が上昇し、血清Caが低値を示したため、骨軟化症が疑われた。腸骨より骨生検を行ったが、骨代謝異常の所見は得られなかった。生検部位より出血が続き、貧血が認められるようになったため、鉄剤の投与を非経口的におこなった。投与開始後、低リン血症が認められるようになった。含糖酸化鉄に含まれるショ糖（ブドウ糖と果糖よりなる二糖類）の急速血管内投与が原因と考えられた。

2.　ＧＨ下垂体腺腫における免疫組織学的染色性と臨床内分泌・放射線学的検討

（脳神経外科学）朱田精宏、西岡　宏、斎田晃彦、和田　淳、高橋　恵、伊東　洋

【対象および方法】18例のＧＨ産生下垂体腺腫を免疫組織学的にcytokeratin による染色性から、Ａ群：dot 状に染まった6例と、Ｂ群：核周囲に線状に染まった12例に分けretrospective に画像所見（ＣＴ、ＭＲ）、内分泌学的所見（ＧＨ、prolactin 基礎値、TRH・bromocriptine に対する反応）および臨床経過を対比検討した。

【結果】Ａ群は全例女性で平均年令37才と若年者に多かったが血中ＧＨ基礎値ではＢ群と差を認めなかった。発症から診断までの経過はＡ群 2.6年、Ｂ群 9.4年とＡ群に短く増殖能の相違やホルモン症状出現時期の相違が示唆された。又Ａ群はＴＲＨ，bromocriptine に反応なくprolactin 高値のlarge adenoma を呈した例が多く、臨床経過も難治例が多かった。Ａ群、Ｂ群は各々sparsely granulated 群、den-sely granulated 群に該当すると考えられ、臨床上も異なる性格を呈していることから、今後これらに基づいた詳細な検討が必要である。

3.　子宮外妊娠保存的治療における内分泌学的治療効果判定

（産婦人科学）堀　量博、柳下正人、舟山　仁、小川俊隆、井坂恵一、高山雅臣

今回我々は、未破裂の子宮外妊娠と診断した4症例について、大量MTX 筋注投与による保存的治療を施行し、同時に尿中 hCG，血中hCG，SP1値の測定を行い、その治療効果判定についての有用性を検討した。

4例のうち3例は保存的に治療できたが、1例は開腹手術となった。保存的に治癒した3例の尿中hCG 値は、治療開始後4日、血中hCG 値は2週間後でいずれも治療前値の半分以下を示したが、血中SP1 値は、尿中hCG 値が1000iu/l 以下になるまで変動は認められず、尿中及び血中hCG 値低下後もSP1 高値を示した1例では治療開始2カ月後に中等度の復腔内出血をみた。また、開腹した症例では、治療後のhCG，SP1測定値の変動は認められなかった。これより薬剤の効果判定には尿中hCG が、その後のフォロー及び最終的効果判定には血中SP1 測定が有用と考えられた。